

I B C 番組審議会月報

2 0 0 4 年 9 月 2 8 日 (火) 7 6 I B C 岩手放送

第 4 9 1 回 I B C 番組審議会・議事録

1、開催 日時 平成 1 6 年 9 月 2 8 日 (火) 午前 1 1 時

2、開催 場所 I B C 放送会館 大会議室

3、委員の出席 委 員 数 1 4 名

出席委員数 7 名

出席委員の氏名

委 員 長 石川 桂司

委 員 小米葉子 坂田 裕一 米谷 春夫

宮澤 徳雄 山崎 文子 吉沢 正則

欠席委員の氏名 阿部 价男 熊谷志衣子 小松 務

佐藤潤次郎 中原 志郎 藤原 正紀

矢佐 俊幸

会社側出席者

小西 隆昭 代表取締役社長

佐藤 敏行 常務取締役

川島 敬司 常務取締役編成局長

井上 隆志 取締役技術局長

村上 憲男 報道制作局長

野田 尚紀 制作部ディレクター

事務局

金谷 保彦 番組審議会事務局長

小笠原 勉 番組審議会事務局次長

4、議 題 I B C 特集 2 0 0 4 『武士道～時代と国境を越えた
新渡戸稲造の精神～』について

5、議事の概要

(1) 議題 IBC特集2004『武士道～時代と国境を越えた
新渡戸稲造の精神～』

(2) <委員の主な発言>

- ・ 新渡戸稲造が5千円札に登場したとき、国際連盟の事務局次長だったとか「我太平洋の橋とならん」という壮大な夢については、おぼろげながら知っていたが、新渡戸が私たちに残してくれたものを再確認できた番組かどうかは、少し不満が残った。李登輝との話は興味深く聞いた。
- ・ どんな構成で作るのかと興味深く見ました。新渡戸の生い立ち、経歴から始まる。台湾の元総督と浅田次郎の対談が少し長い感じがした。いまひとつ武士道の本当の中身や、新渡戸の精神そのものが直接的にびしびしと伝わる感じではなかった。
- ・ 本当の武士道そのものを知ることより、海外や県外などでいろんな人と話したとき、岩手の新渡戸という人がどんな人なのか、かいつまんで話せる程度になったかなという思いです。もう少し、新渡戸稲造を勉強しようかという気になる番組だった。
- ・ 李登輝と浅田次郎の対談に興味を持って見ました。それまで李登輝が日本の武士道について語ることは、新聞などを通じて見ていましたが、直接本人の口から聞き、改めて82歳になる李登輝という人物が、真摯でひたむきで、大変関心の深い人物に見えました。
- ・ 改めて道徳観の必要性、愛国心と言葉にしてしまうと抵抗感を持つ人もいるが、自分の国を愛する、誇りを持つ精神の必要性を痛感しました。
- ・ 李登輝の話の中に「誠」、あるいは「礼」という道徳に関する言葉が出ました。「誠」とは、考えるだけではなく実行に移さなければだめだという話。「礼」については、日本人は余り礼に重きを置き過ぎているのではないか、という非常に示唆に富む話でした。
- ・ 映像メディアと活字メディア。メディアミックスという言葉がありますが、この対談をもう一度、字で読ませてもらえれば、もっと頭に入るかなと思います。映像で見て聞き流していくと、時間が経つとどんどん忘れてしまう。それを活字で残すことを是非考えた方がいいと思う。

- ・ この番組で物足りなかったのは、これからデジタル映像になっていく場合、口では言い難いんですが、テレビならではの心に響く映像、武士道を感じさせる映像がなかったように思う。
盛岡は多くの人材という財産を持っていますので、それを生かして、盛岡からグローバルに世界に影響を与えていくような番組を制作して欲しい。
- ・ 若い頃、日本の宗教教育は何かと聞かれて答えられなかった。それに対する挑戦で、武士道に宗教教育のひとつの可能性を見出して求めた。しかし、ヨーロッパの場合は、宗教教育が道德教育になり得るが、日本の場合は、道德を教えるのに宗教教育にはなかなかならない。教育学の世界でも非常に難しい。新渡戸の武士道で掘り下げられるかとなると難しい。学生たちに考えさせる素材としては非常にいいと思った。質の高いいい狙いを持った番組ですが、日曜日のこの時間帯としては座りが悪かったという印象が強かった。

<局側>

- ・ なぜこの番組を作ろうと思ったかという、自分も含めて余り新渡戸稲造を知らなかったし、岩手の先人を映像で紹介できないかと思っていました。今回、新渡戸稲造がお札の肖像から消えるタイミングであったこと、武士道に関するいろいろな本が出たこと、ラストサムライの映画などもあり、今がチャンスだと考えました。
そこで、浅田次郎さんの「壬生義士伝」と李登輝さんの接点を見出し、対談できないかとお願いしたら、とんとん拍子に進みました。番組の中では、10分で新渡戸稲造の人となり、武士道については5分でまとめました。対談は、実際は1時間台湾で収録しましたが、15分に凝縮しました。取材して行く中で、国内での動きも見えてきて、岩手が一番取り残されていると感じ、あえてそこを感じて頂きたいと、北海道や東京、あるいは台湾での活動の流れを映したところがあります。
メディアミックスをという話ですが、対談の話を進めていく中で、文芸春秋社から、相乗りの話を頂き「月刊文芸春秋11月号」に**武士道と愛国**というタイトルで掲載されます。
武士道を感じる映像がなかったという指摘ですが、非常に難しい課題で、工夫したつもりではあったのですが、実写部分に頼らざるを得ないところもあり、今後の課題として考えさせていただきます。